

# キャリアデザイン学部の教育と研究のあり方について：主として「教育学」に焦点を置いて

SANUKI, Hiroshi / 佐貫, 浩

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

82

(発行年 / Year)

2010-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007569>

# キャリアデザイン学部の教育と研究の あり方について

—主として「教育学」に焦点を置いて—

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

## はじめに

最初に、この小論の趣旨を述べておきたい。この小論は、学術研究論文としてではなく、現在のキャリアデザイン学部の教育と研究のありようについての私なりの検討視点を明確にしようとしたものである。キャリアデザイン学部の卒業生に聞いてみると、結局キャリアデザイン学部とは何かを就職面接の時に説明しきれなかったというものが多い。そのことは当然、大学時代に学部教育において何を学んだかという点での印象の薄さや、自らの獲得した学士としての専門性についての曖昧さとも結びついていると思われる。そしてそういう側面は、より根本的には、キャリアデザイン学部に、自分探し学部としての期待を持って入ってきたけれど、その目標が十分達成できないまま卒業を迎えてしまう、とでもいうような、いわば目的が定まらない大学生活を送ってしまったという傾向の広がり——以前からそうだということになるかもしれないが——と結びついているように思われる。その問題を教員の側から見れば、各教員の専門研究が、学生の学習要求となかなかマッチせず、従って教員も教育の手応えをなかなか持ちにくい状況を生み出しているのではないかとも思う。私のような年老いた古典的大学教員は、どうしても自らの専門領域の研究こそ自分の持っている学生への教育力の核心と考えてしまうのだが、そういう論理がなかなか働かない状況の広がりに対し、時には自信を失い、時には消耗感

を味わい、あるいはそういう困難を学生の質の低下のせいにしたくなったりもするのである。この小論では、そういう問題を、幾分か整理し、解きほぐし、困難や課題の焦点がどこにあるのかを考えてみたいと思う。尚、この小論の中では専門を教育学に絞って論じている。それは、私の専門が教育学だということとそうしているに過ぎないのであって、キャリアデザイン学部の教育、経営、文化・コミュニティーという一定の焦点的専門があることに対する評価を含むものではなく、逆にむしろ、おそらく経営や文化領域からしても同質の問題があるのではないかと考えていることを断っておく。

## (一) 問題関心

この間、キャリアデザイン学部の学生教育に対して、どうもうまくやれていないという感じを持つことが多くなった。どうしてかと考えてみるに、もちろん私自身の力量不足というような面があることは承知しているが、それだけでもないようにも思う。

おそらく、一つには、学生の質が変化してきたという点があると思われる。しかしそれと共に、より大きな原因として、自分の専門（私にとっては教育学）が学生に対する教育力として生かし切れていないという感じを持つ。

何故なのだろうと考えると、この学部の中で、あるいは高校への出張説明会などで、いわば公式

に——例えば、高校生への学部説明会でとか、シラバス上でとか——教育学を語る場合に（大学の学問を語れと注文されると、私が説明できるのは教育学なので）、どうしてもいわば枕詞のように「キャリアデザイン学としての」という言葉をくっつけて語っているということに気づく。従ってこのキャリアデザイン学部には教育学の専門のスタッフがある程度集まっていて、教育学が専攻できるというような話し方を、ほとんどしてこなかったことに気がつく。聞く高校生の側も、教育学をやりたいからここへ行こうという選択の仕方はほとんどしてこなかったのではないかと改めて気がついた。以前所属していた法政大学文学部教育学科の時代に「教育課程論」だった私の講義は、内容はあまり変わらないにしても「キャリア形成と学校」という名称になった。そしてそういう名前である以上、シラバスでは、学生に対してキャリア形成を論じるのだというメッセージを送ったことになり、講義もそういう「傾斜」をかけることになる。もちろん、そういういわば新しい目標の下で教育学自体を組み替えるという視点からすれば、問題はそういう内容を作り出せていない自分の教育学の弱さ、閉塞性の問題だと言えないこともない。

しかしどうもそれだけではないように思える。受験生にも、学生にも、当然のことながら、キャリア形成というものを学部の基本理念としているというメッセージが届いているために、最初から、どうも学生にとっては教育という領域や、教育関係の専門職を目指すという構えが薄いように思える。そうすると、そういう中では、キャリアデザインを目指す学生にとっては、教育学からのアプローチは、いわば学部の基礎教養というレベルでは一定の意味が感じられるとしても、専門としての教育学への接近の回路への要求は少なく、教育学を専門的に探求してみたいというような学生もなかなか育てこないことになる。しかし私のような教育学を専門とする教員にとって、学生が獲得すべき職業的専門性と繋がりをうような専門教育として中身を伴って教えられるのは、やは

り教育学であるほか無いという限界がある。とすると、私にとっては、学生教育と自分の研究とが分離してしまい、あるいは専門教育という段階の教育において、かなり広範な学問領域に渡る——領域がはつきりしないというべきかも知れないが——学生の希望に応えるという点で、はなはだ力量不足という感じに陥らざるを得ない。逆に自分の専門性を強く打ち出せば、その講義を取る学生数が少なくなるという状況が生まれるように思う。そういう中で、不完全燃焼感を教員としても抱いてしまう。

そしておそらく、学生の質の変化がそれに追い打ちをかけているのだと思う。目的意識がはつきりしない。友だちに同調して講義やゼミを選ぶ非主体的選択が増加している。大学で学問を学ぶのだという感覚が薄まっている。本がなかなか読めない。討論も、仲間うちのおしゃべり段階を超えられない……等々。もちろん今までもそういう傾向は指摘されてきていた。こういう学生の状態に対し、色々苦勞しながら学問の世界へと誘い込んで、そこに新しい大学生としての学びの世界があることに気づかせる。そしてそういう学びのスタイルが立ち上がってくると、ようやく学生同士の相互教育力が起動し、少しは大学生らしい雰囲気生まれ、卒論執筆へと乗せていくことができる。それでようやく教員らしい感触も味わえるというわけである。そしてそういう戦略が、曲がりなりにも一定の成果を挙げてきた感触を得ることも今まではできたように思う。

ところが、そういう困難が深化していった、一向に大学生らしい学びが成立しない。そして就職困難という中で、学生は、就職に向けてもう3年生が熱中せざるを得ない状況になっている。キャリアデザインという言葉は、そういう中では、就職に向けて準備することという意味においてより切実になり、リアリティーを持つようになる。

しかし本来、大学というものは、大学の学問的専門性を介して将来の職業といわば間接的につながるという側面を持っていたはずである。それが例えば教育学であったり、経営学であったりしたは

ずである。本来、各大学、学部の「キャリア教育」は、その学部の専門の領域の科学や方法や現実の科学的把握の獲得を媒介にして、達成されるはずのものである。それがないと、就職選択の手法を身に付けることへと学部教育が矮小化される。しかしそういう学部の専門の科学の世界を成立させることが困難になってしまうと、学生の側から見ると、大学は、やはり就職について表面的なスキルを獲得していく訓練場に見えてしまうことにならないだろうか。

元に戻れば、そういう事態に介入して大学生を専門の学び——私にとっては教育学——へと誘い込んでいこうとするとき、はたして学生にとって、教育学は、関心がある学問なのか問われてしまうのである。いわば専門教育の入口でミスマッチが起こってしまうのである。そこでどうすればいいのか立ちすくんでしまうのである。

しかし再び、学生の側からこの問題を見るならば、ではキャリアデザイン学部において、教育学の一定の専門的学習を上昇していく体系をどう提供してきたかという点からいえば、実は正直なところ、そういう体系は非常に弱いといわざるを得ない。現状では、学生側から見ると、教育学に関する講義の大半が「教育〇〇学入門」のように感じられるのではないだろうか。専門（教育学）のカリキュラム体系は数人のスタッフ構成では、かなり難しいといわざるを得ない面もある。また現在のキャリアデザイン学部の「多様」なカリキュラムの中から、特定の専門を系統的に選択し修得して、学生個人の側である特定の専門（例えば教育学）にそった学習の体系を編成していくことも、単位取得の条件からして、大変難しい。この両方の条件が相乗しあって、教育学の体系をある程度上に昇っていくという専門についての体系的学習のシステムは、大変に不十分なままになっている。

学生の側からこのキャリアデザイン学部のそういう問題性はどのように捉えられているのだろうか。学生の声を紹介しよう。

①「好奇心が旺盛な性格と、自分の将来の方向性が定まっていないという点から、『キャリアデザイン学って何だろう』、でも色々なことをやっているうちに、自分のやりたいこと、生きていきたいフィールドが少しずつ見えてくるのではないかという期待感を持ったことから、この学部を選択した。入ってみると、3年生までがあつという間に過ぎてきたわけだが、ただただ様々な科目を『消化』してきたというのが1年生。はっきり言って“どうでもいい”授業ばかりで本当につまらなかった。そして2年生にあがり、少しだけ専門的な科目が増えて面白かった。興味のある経営の分野やメディアの分野、さらにゼミが少し出てきたことで、やっと少し勉強していると感じることができた。しかし3年生になってみると、基幹科目がとれていないことに気づき、またしてもつまらない授業に戻ってしまった。どの科目も出席はしていたし、まじめに取り組んでいたが、何かを学び取れたと感じることができたのは、少なかった。どの教科でもその分野の知識をすくい取るようなものばかりだったので、それでは経営に行ったりした方が専門性が身に付くかも知れないと感じてしまう。この学部の面白いところは、広い範囲で学び取れることかも知れないが、『～入門』というような授業をやるのであれば、少なくとも教員同士で経営学、教育学などの基礎固めができるようなものにピントを合わせて欲しい。ゼミをやっていなかったら本当にこの学部で何をしたのかわからないと思う。」（3年）

②「キャリアデザイン学部に入学した理由の一つとして、私も『自分探し』というイメージを持っていたからということがあります。キャリアデザイン学部に入って2年になりますが、今になって大学は『自分探し』をしている余裕のある場ではないと感じ始めました。キャリアデザイン学部は、教育、文化、経営という3本柱から成り、学年があがるにつれてそのうちのどれかの専門生を高めていけるということでした

が、履修必須の科目を見ると、まったくそのようなことはなく（どれもまんべんなく取らないといけない）、かといってキャリアデザインそのものを専門的に学べる様な科目もほとんど見あたらない状態で、キャリアデザイン学部学生として、自分の学部・学科にどういう誇りを持てばよいのか、気がつけばわからなくなっていました。現在履修している授業には、『キャリア』と名の付くものが多くありますが、実際は単なる経営の授業であったり、教育の授業だったり、何が『キャリア』なのか『キャリア』とどのようにかわる授業なのか、教授からまったく提示されないままなこともあって、自分の学部なのに混乱してしまうことがあります。（2年）

③「『キャリアデザイン学部って何をしているの?』という問いを、私はかれこれ数十回聞いている気がする。そしてそれに対する私の解答は『自分探し（笑い）』。もちろん皮肉の意味を込めての答え方であるし、就職試験の時にはそれなりのことをいっていたと思う。しかし正直なところ、いまだに何を学びに来たのだから良くわかっていない。周囲の友だちも実際同意見を持っている。その理由としては、『この学部に来る学生は、どの学部に行くかはっきりしないので、目的意識の未確立がそもそもの出発点』という性格が強いからだろう。結局何となくはいって、何となく授業を受けて、何となく単位を取って、何となく卒業していく。私はこれを『何となく主義』と勝手に呼んでいる。この主義、思想は、同化と自閉を非常に生みやすく、大学における学問研究にとっては脅威である。」（4年）

しかしそのような困難は、キャリアデザイン学部発足の当初から予想されていたところであって、そのような問題性を踏まえた上で、努力してきたのかと問われれば、なかなか難しいといわざるを得ない。キャリアデザイン学部においては、専門的教育・研究体系を、教育学や経営学や文

化・コミュニティー領域に即してそれぞれの個別の領域の専門を別々に立ち上げるべきものではなく、キャリアデザイン学という統合された一つの横断的性格を持った専門（領域や学問体系）として新たに創造していくことが必要だという考え方がある。いやむしろそれこそが、この学部を立ち上げるときの基本理念だったというべきかも知れない。しかし実際には、そういうキャリアデザイン学が学生にとって目に見えるように提示されているとはいいがたい状況にある。

とすれば問題は、この根本に立ち返って、今直面している事態をどういう問題として把握し、その問題性をどういう方向で越えていくかの新たな検討と選択の前に今私たちが立たされているというわけではないだろうか。

## （二）問題関心の補足

この問題を教育学領域の先生方と議論したとき、討論の中で次のような点も感じ、また意見も出された。その点を補足しておこう。あくまでこれは、私個人の受け止めである。

- (1) 現象としては、キャリアに入学してくる学生の中で、教育学を意識して、あるいは目標として入学してくる学生が減っているように感じられる。キャリアデザインという名称や、現在のキャリアのカリキュラムの中では、どうしても教育学や教職というものへの目標を持つ学生へのアピール力が弱い感じがする。
- (2) キャリアデザイン学部を立ち上げる上で、経路上教育学教員がどうしても大きな役割を背負ったこともあって、かえって、「教育学」を前に出しにくい面があるのではないか。キャリア（学）をとおして教育学を語らなければならない制約を感じているのではないか。また「キャリアデザイン」という名称が持つメッセージは、学生に教育学をあまり意識させない面がある。
- (3) キャリア教育が職業的専門性の教育を意味するなら、教職・資格課程をもっと前面に出

し、その部分とキャリアデザイン学部の専門科目とをより豊かに統合することで、学部独自の専門段階に即したキャリア教育の柱として、積極的に位置づけるべきではないか。

- (4) キャリア教育の中で、より本質的な労働のあり方——格差貧困問題がこれほど大きくなっていることもある中で——を系統的に考える内容が、カリキュラムとしてはしっかり組み込まれていないのではないか。労働者の権利、労働法や労働の社会学、労働に関する福祉のあり方など。「人生前半の社会保障」(広井良典千葉大学教授)が大きな課題になりつつある中で、個人の側のキャリアデザイン形成に止まらないで、社会の側のキャリアデザインナビリティーをどう組み替えるかという領域をもっと積極的に組み込むべきではないか。そしてそこをキャリアデザイン学部の研究対象として積極的に位置づけることで、社会学的、経済学的領域と教育学、心理学的領域との境界領域に位置付く学部の独自性が浮かび上がる可能性があるのではないか。
- (5) 教育学の系統という点で考えてみると、キャリアでは学生が教育学に関する基礎概念を系統的に学んでない(基礎知識の欠落)ので、時事的な問題には反応するが、学問的な講義や思考には大きな抵抗があり、なかなか深まらない。
- (6) 学生のレベルが、ここ2年ぐらいで、急に落ちたと感じる。学習内容＝教育内容が学生の中で、積み上がっていかない。ゼミに「グループ」で申し込むなど、個人の自律的判断、関心でゼミにはいるというのが薄らいで、居場所を確保するための戦略でゼミや講義を選んでいるのではないか。ひとりで食堂にはいるのが怖いというのが6割近くを占める。かなりの学生がクラス担任制がいいという意見を持っている。居場所を確保することが大きな関心事になっている。
- (7) 就職戦線の厳しさが大きく影響している。最終面談の直前で打ち切り、採る意志がないの

に応募したり試験したりする等も増えている。教職に関していえば、小学校教員は今引く手あまたで、小学校教員の資格試験受験なども積極的に紹介すべきだろう。しかし中学高校の社会科(キャリアの免許は社会科関連に限定されている)は依然として大変厳しく、教師になるのは非常に困難な状況は変わっていない。その意味では教育学と就職との関連はなかなかつけられない状況が続いている。

- (8) 教育関係のキャリアモデルがあまり紹介されておらず、学生に教育学を通した職業選択コースのイメージが作り切れていないのではないか。キャリアデザイン卒業生の中にも少なくない卒業生が教育関係職に就いており、もっと積極的に紹介する必要がある。

以上のような意見——それらはかなり共通かつ共感を得た意見であるように感じた——からも、やはり、学生の興味と専門(教育学)とがうまくマッチしていないのではないかという思いを教員の側が共通に抱いているように感じられる。また学生の学習目的が相当「浮遊」していて、それはキャリアデザイン学部が自分探し学部であると受け取られていることとも結びついており、学部教育の系統性の弱さと合わさって、大学の専門教育のイメージを持ちにくい状態を生み出しているのではないか、職業選択とも積極的に結びついた専門教育のもう少し強固なイメージを作り出すことが必要なのではないかとの思いも共通しているように思われる。

### (三) キャリアデザイン学部のキャリア教育とは何かについて

#### (1) 二つのキャリア教育

キャリアデザイン学部が今抱えている困難の性格を、学部の中核としてのキャリアデザイン学の学問イメージがまだまだ明確になっていないこ

と、さらに専門教育としてのキャリアデザイン(学)の教育体系が明確さを欠くこと、すなわちキャリアデザイン学部における専門教育(本来キャリア教育の中核は各学部の専門教育に他ならないのだが)としてのキャリアデザイン(学)教育の曖昧さという逆説的な事態として捉えることができるかも知れない。

当然のことながら、キャリア教育という場合、二種類のキャリア教育が大学には存在しなければならない。ひとつは、将来の職業選択を、一定の専門的な科学や方法を身につける形で可能にしていく個別大学や学部固有の専門教育である(「専門教育としてのキャリア教育」)。もう一つは、その専門性の獲得の土台に据えられるべき教養としてのキャリアデザイン力の獲得である(「共通教養としてのキャリア教育」)。後者は、各人に固有のキャリア形成・実現過程をデザインしプログラムしていくキャリアデザイン力であり、同時に自らのキャリアデザインをより豊かなものとして確立していくための社会的条件等についての理解とその変革への力である。前者は昔から各学部の「専門」として存在してきた。そして「昔」は、そういう専門教育が、キャリア教育の中核として位置付き、それ以外のキャリア教育はほとんど存在しなかった。したがって、専門教育はキャリア教育そのものであり、特に大学では、キャリア教育という概念自身が必要なかった。しかし今日では、大学教育において、すべての学生に対する進路選択にかかわる丁寧な支援と、それに必要な一定の共通土台としてのスキル、場合によっては一定の基礎教養やコミュニケーション力、等々のいわば就職(就活)のために必要な基礎教養、基礎人間力の形成に大学が責任を負わなければならない様な状況も生じてきた。そしてそういう意味での第二のキャリア教育支援のために、大学にはキャリアセンターも設けられるようになってきた。

その背景には、学部の「専門」がそのままでは就職のための「職業力」とはつながりにくくなっているという事情、別の言い方をすれば、就職の評価対象になる専門性は大学院レベルが中心

になってしまっているということもあるだろう。特に社会科学、人文科学系統の学部は、その専門が法学や経済学や文学などとなっていて、就職、すなわち職業的専門性の獲得とはなかなか結びつきにくい状況が生まれており、就職のために身に付ける「専門」とは違う「スキル」(語学やITスキル、さらには就職活動力ともいうようなサバイバルスキルなど)の獲得が付加的に求められるようになってきたという事情も反映しているように思われる。

(注) この小論では、「キャリア教育」という概念は、いまここで述べた「専門としてのキャリア教育」と「共通教養としてのキャリア教育」という二つのものを含んだものとして用いる。CD学部の専門教育は「キャリアデザイン学」に基づく「キャリアデザイン」の力を獲得させることとして使用する。従って、「キャリア教育」は、「キャリアデザイン教育」という意味に限定したものとしては使用しない。

## (2) キャリアデザイン学部の学問＝科学の構造(の矛盾)

ではこういう構造を確認した上で、果たして、キャリアデザイン学部は、この二つのキャリア教育について、どういう内容を持っているのか。第二のいわば共通教養としてのキャリア教育を手厚くするという点は非常に明確で、また我が学部の魅力でもあろう。自分の進路の方向が決められない、あるいは興味ある分野が決まらないという学生(高校生)にとっては、そういう選択を猶予されて、大学に入ってから考えられるというメッセージも、大変魅力あるものであろう。しかし第一の「専門教育としてのキャリア教育」という点ではどのような内容を提示し得ているのだろうか。

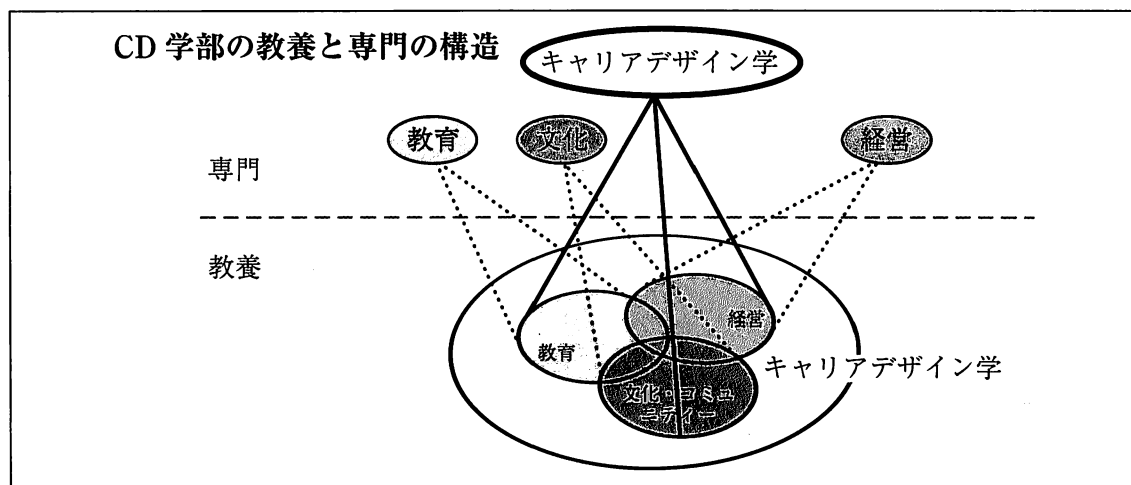
率直に言って、今のキャリアデザイン学部のもっとも大きな矛盾は、この第一のキャリア教育(キャリアデザイン学の教育)の弱さであり、その意味では普通の学部がその学部としての基本理念、目標として掲げているはずの専門教育の内容的な柱が鮮明でない、あるいは弱い、あるいは学生にとって目に見えるようになっていないことに

あるのではないか。そういう矛盾故に、キャリアデザイン教育（学）を柱に掲げた学部が、皮肉にかえって、専門としてのキャリア教育の内容が見えにくい学部になっているという逆説的事態、困難を生み出しているのではないか。

もちろん、そういう問題が生じうるであろうことは、当初から予想されていたというべきだろう。そういう事態に対する当初の解答は、学部理念を表した三つの○（教育、経営、文化・コミュニティ）が相互に重なり合う構図であった。しかし結局その構図は、図の下部の教養段階の構図であろう。

ではこの教養段階で三つの○が重なり合う構図は専門の段階ではどういう構図へと展開するのだろうか。それはこの図の上半分に描いてみたよう

な分裂構造を示しているのではないか。それぞれの領域、またそれぞれの領域の個々の教員は、やはりその中核にキャリアデザイン学が座っていないわけにはいかないし、学生もまたそれを求めているという思いがありつつ、しかしそういう一貫したキャリアデザイン学の体系を描いて学生を専門教育するという手だても、カリキュラムも、またイメージも十分には持ち得ないままに、それぞれの円錐の上に、旧来型の専門をイメージしつつ、そこに向けて専門教育を構想するという、分裂的事態に客観的には陥っているのではないか。そしてそれは、個々の教員の力量の問題ではなく、基本的にはこの学部の持っている性格による困難と見るべきではないだろうか。



その点について、学生の声は、切実でもあり、また厳しい批判を含んでもいる。

①「1－2年のうちは一般教養全般を広く学び、3、4年でキャリアデザイン学の専門性を学び、身に付けられると考えていたのですが、実際にはキャリアデザイン学がどういう学問なのか、まだ良くわかりません。……キャリアデザイン学部というからには、キャリアデザイン学とは何かというはっきりとした形が欲しかったです。先生たちはそれぞれ教育学や経営学の先生

だったりして、キャリアデザイン学の先生はいらっしゃらなくて、キャリアデザイン学のとらえ方もそれぞれバラバラでした。『多様性こそキャリアデザイン学』という先生もいらっしゃいますが、中途半端さをごまかしているだけのような気がします。」(3年)

②「キャリアデザイン学部に入って、実際に授業を受けてみると、すべてにおいてキャリアデザインにつなげようとしている気がする。私は文化、経営、教育の授業を幅広く受けたが、どれもだいたい同じことをやっていて、良くわか

らないことが多かった。先生の専門としていることによって内容は全然違うのに「キャリアデザイン学入門—〇〇」という授業名で、毎回先生が変わり、講義をする意味がわからない。最後のまとめでは、先生によって内容が違うので、結局キャリアデザインという言葉でまとめている気がする。2年生のいま、私がどこまでキャリアデザインについて深く学べたかという、疑問である。3年生になれば就活が始まるし、大学で勉強をしたという感じはこのままではないまま卒業する気がする。卒業までにキャリアデザインというものをもっと形のあるものとして、自分の中で説明できるようになって、企業で働きたい。今のままでは、先生と生徒のやりたいことや思いが伝わらない状況のままで、学部がつくられてしまう。」(2年)

③「キャリアという語句がついている授業が多く、これはキャリアデザイン学部だからしょうがないのかも知れないが、いざ授業を行ってみると経営学と冠をつけてもいいような授業もあり、バラバラに勉強している感が否めない。やはりキャリアというからには、人生の生い立ちや他の人に影響を与える事物を考えた上で体系的に勉強しなければ、他の学部と違った特色を最大限に発揮できないのではないかと思った。もっと様々な人とふれあい交流できる環境がなければ自分自身のことも良く理解できないまま卒業してしまうのではないかと思う。」(2年)

④「就活で自己紹介をする機会があると、必ず「キャリアデザインって何？」と初対面の就活生や人事の方に聞かれる。私は自己推薦で、キャリアデザインについて学びたく、わざわざ入学した。しかし3年生になった私は、「キャリアとは〇〇です」と学んでいる内容をはっきりと相手に伝えることができない。おそらくそれは、教育、経営、文化をまんべんなくただの教養科目としてしか身に付けていないからだと思う。人事の方でキャリアデザインについて興味があり多少知っている方や他大学でキャリアデザインという授業があるという学生と出会う

こともある。人それぞれに持っているイメージや考えは違っている。キャリアデザイン学部で学ぶ学生として、こういった興味を持っている人たちに語ることができたら良いのと思う。最近、ゼミでワークライフバランスなどの経営を学んでいるので、『経営を主に勉強しています』というようにしている。(3年)

誤解がないように補足するが、専門のキャリアデザイン学の一環として教育や経営や文化・コミュニティの領域の研究を展開されている方がおられることを無視してそういうことをいおうとしているのではない。私も、一念発起と言うべきか「個性論」へ挑戦することを通して、一定の試みはしている——今年も書いたので「個性論ノート」6回目になり、400字で400枚を超えることになる——と言えないわけではない。しかしそうやってみても、それは基本的に「共通教養としてのキャリアデザイン学」なのであり、なかなか「専門」とはなりにくいことを感じるのである。

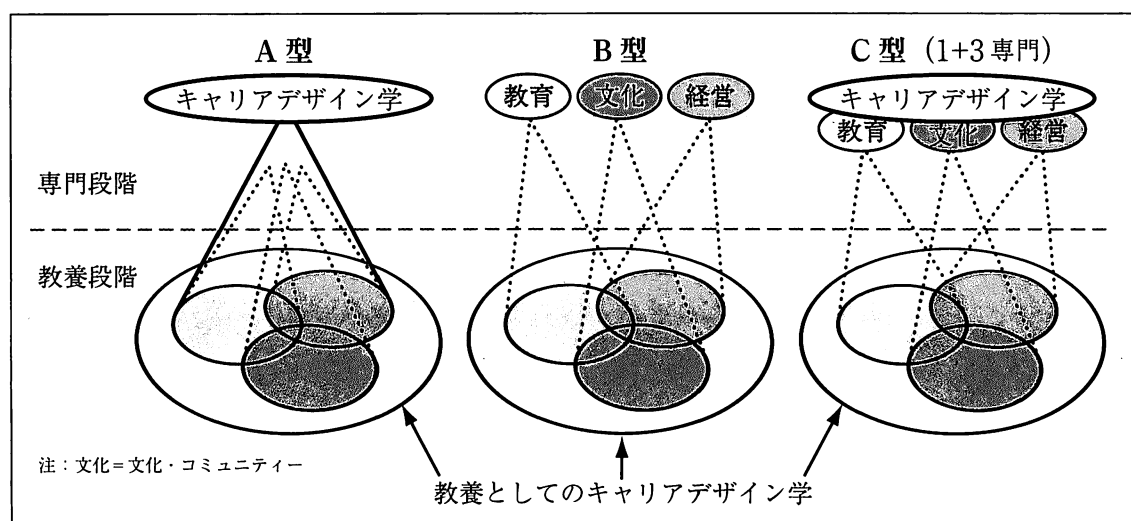
最近私の講義に対するある種の「うんざり感」を持っている学生がいることを感じている。その理由は良くわかる気がする。雇用の不安定や労働権や人権が奪われている状況、あるいは個性の剥奪が生まれている状況など、どうしても困難性の話に焦点が行ってしまい、極端な話、それと「たたかわないと」生きられないという印象を与えてしまうからではないかと考えている。そういう状況にたいして「希望」と見通しを獲得するには、自分の専門を確立し、その専門性を身に付けて、職業的見通しを得、そしてその職業の中で私の強調するような現実とも「たたかっていく」という見通しが確保される必要があると思う。社会に対して有能な力と専門性を持って対処していくという自分の成長が感じられるような大学での学習・研究をつかむという実感を学生は獲得したいと思っているのだらうと感じる。しかし、後者について、どうも私が語り、指導できるのは、やはり教育領域であり、教師になる見通しを与えるという領域が中心にならざるを得ない。

より一般的に言えば、キャリアデザイン学を第一の専門（「専門教育としてのキャリアデザイン学教育」という意味での「専門」の学として位置づけることは、とても難しいということでもある。そもそもキャリアデザイン学をそのまま専門性として行かせる職業分野は非常に少ない。これは、われわれの当面の努力で簡単に克服できるようなレベルではないようにも思えるのである。

### (3) 考え方

現状に対して、如何に対処すべきか、明確な案

があるわけではない。思考実験として構図を示しておこう。ただしこれは他にも多様な形が描ける。B型にしても頭が2つというのもあり得る。思考実験として両極を提示することでわかりやすくすることにここでの主眼があるので、それ以上の意図はないことを断っておく。しかし中心的な関心は、もちろん、キャリアデザイン学部における専門段階の「専門」とはどう設定されるべきかという点にある。



〔A 型〕は、教育、文化、経営を統合したキャリア学という点にこそ結晶させて、この学部の基本的な専門の学問内容を構想するという、この学部発足当初の理想の型である。〔B 型〕は、教養段階の3領域が「教養としてのキャリアデザイン教育」として統合された形を土台にしつつ、専門としての段階は、それぞれの教育、経営、文化・コミュニティーの体系をもっと鮮明に打ち出し、それぞれを専門教育の柱とするものであり、3つの学問領域、あるいはそれに準じる専門段階での学習体系（カリキュラム）を持つ型である。〔C 型〕は、形の上では、この両者を併せたものであるが、キャリアデザイン学を専門段階の専門として位置づけ、同時に教育、経営、文化・コミュニ

ティーを専門として探求する方向も位置づけるといえる。＜1＋3専門＞型ともいえる。これは消極的な意味で、現状型といえなくはないが、＜1＋3専門＞を、キャリアデザイン学部の専門教育の4つのコースとして明確にし、入学者は専門段階でこの＜1＋3専門＞のどれかを選択するということを自覚して入学することを求めるというものである。この1に相当する「キャリアデザイン学」は、大学院のキャリアデザイン学を学部の方へ下ろすような形で、その内容を蓄積していくということになるのではないかと。

〔A 型〕についていえば、一応今までそういう形が「理想」とされてきたように思えるが、これは私の思い違いかも知れない。いずれにしてもこ

の何年かの「努力」を経て、やはりこのような問題点が浮かび上がってきたと考えるべきだろう。[B型]についていえば、経営学部や文学部がある中で、そちらに行った方がよいということになってしまう面もある。また[B型]を取るとすれば、自ずと教養段階の教育のあり方、またカリキュラム体系もそれぞれの「コース」に対応して、独自性を持った体系的カリキュラムとしての側面が強まるという傾斜も生れるかも知れない(ここでいうコースは緩やかなものから固いものまで、多様なバリエーションを含む)。

いずれにしても、これは、学生の側から見ると、「キャリアデザイン学部の専門って何」という問いへの答え方をどうするかということであり、教員の側の問題としていえば、自分の教育と研究の統合、あるいは折り合いを如何につけるかということへの方向性を探ろうとすることである。この2つの問いを、今日の時点で本格的に検討する必要があるということである。なおこの点について、学生の声を紹介しておこう。

①「私はキャリアデザイン学部はA型だと思って、この学部を希望してきた。しかし実際に学んでみると、B型であり、教育、経営、文化のどれかの専門に入れられてしまう。……正直、本気で教師を目指す人は、最初から教育専門の学部へ行けばよい。なにかと両方学びたいからこの学部にきたはず。そういう人のためにも、一つの方法として、ゼミは一つではなく、経営と教育の両方をとればよいのではないか。……B型では、キャリアデザインは、進路を考える期間を延ばしてくれる、専門をゆっくり決められる学部であるという話では納得できた。しかしこれは大学に入ってから気がついたので、高校生の時にはわからなかった。これからのことを考えたら、AかBかのどちらの学部なのか、はっきりさせないと多量の多くの学生が何を学んだかわからないという状況になってしまう。私は2年間のおかげで、B型のように、3年次の専門分野を決めることができた。しかし学ぶ

前は、A型だと思っていたので、この違いをなくす必要がある。CD学部は、A型であるキャリアデザイン学科と、B型のようなキャリア追求学科(仮)と分ける必要がある。A型をきちんとしたものにするなら、説明の時に、曖昧になる危険性を強調して欲しい。」(2年)

②「まもなく2年生が終わるのだが、いまだに学校で何を学んでいるのか人に説明できない。むしろ入学前や入学して間もない頃の方が、自分が何のために何を学ぶのか、はっきりしているような気がする。2年生になり、私は経営へ、お友達は教育へ、あの人は文化へというように特化するために別れていったのだが、経営をやりたいのなら最初から経営学部をチョイスすれば良かったのである。キャリアデザイン学部が自分探しをしているような学部として受け止められてしまう一因がそこにもあるのかもしれない。キャリアデザイン学が学問としてきちんと成立しているとはいえない以上、学校側も学ぶ側もまた、試行錯誤の状態でキャリアデザイン学をやっているとしかいえないのかもしれない。ただせっかくこの学部に来たのだから、『A型』を目指して、できればキャリアデザイン学を究めていきたい。そのためには大学院まで行かないと厳しいのかも知れないが、現在のカリキュラムの中からも、自分なりのキャリアデザイン学を成立させていきたい。そうでなければこの学部をチョイスした理由を見失ってしまうからである。」(2年)

③「実際にキャリアデザイン学部で学んできて、1年次はキャリアデザインという学問の基礎を学び、2年次は様々な学習分野とキャリアデザインの関連性を学んだことで、複数の面から人生設計を考えるという志望理由はかなえることができたように思う。しかし3年になって専門分野(私は教育分野)のゼミや授業を学んでいく中で思ったことは、『専門分野』と『キャリアデザイン学』の関係が薄くなってしまい、『専門分野』が独立した講義になってしまっている気がする。1, 2年次にキャリアデザイン

の基礎を学んだのはよいが、そこまでで、キャリアデザインという学習が終わってしまっているのだ。キャリアデザイン学からスタートし、ゴールもまたキャリアデザイン学でなければ、キャリアデザイン学部と呼べないだろう。専門を学ぶ上で、キャリアデザイン学をもっと結びつけて欲しいと思う。」(3年)

④「入学当初は、A型がキャリアデザイン学部なのだと思っていて、もっと教育、経営、文化コミュニティを総合的、多角的に学べるのだと思っていた。しかし実際にこの学部に入って学んでいるうちに、B型なのだと気がつき、最初は戸惑ってしまった。私はオープンキャンパスのスタッフを1年生の時からやっていて、市ヶ谷キャンパスのすべての学部を紹介し、学部選択で悩んでいる受験生のお手伝いをする部署に所属している。特に今年はキャリアを志望する受験生が非常に多く、私はキャリアの学生として、実際の授業や生活について聞かれることも多かったのだが、良くキャリアは“広く浅く”というイメージを持たれていることに気づいた。しかし実際はB型のようになっていて、3分野学ぶこともできるが、正確には一つの分野に集中しているように思える。“広く浅く”のイメージをマイナスと捉える人にとっては、B型というのは有効であるが、プラスに捉えている人にB型だというのはとても言い辛く、いつも困ってしまう。A型にしろ、B型にしろ、はっきりどちらかに決めて欲しいと思う。でなければどう進めばいいかわからない。」(2年)

これらの学生の感想に触発されて思うのであるが、この学部のアイデンティティは、少なくともキャリアデザイン学部という名称を持っているかぎり、たとえそれが未だ形成途上のものであっても、キャリアデザイン学であるほかない。それを放棄する選択は多分あり得ないだろう。そしてそのキャリアデザイン学を教養段階における一定の学問＝教育体系として作り上げることなしには、学生の声に答えることはできないように思う。A、

B、Cの3つのいずれの形をとるにせよ、「教養としてのキャリアデザイン学」の形成は、なぜキャリアデザイン学部を創り、また学生がなぜここに入学してきたのかを説明しうるそのアイデンティティの核となるだろうからである。そういう意味では、この学部には所属する教員は、それぞれの専門の探求に加えて、その専門のある発展として、キャリアデザイン学へのアプローチを、放棄することはできないと改めて考えさせられる。

補足として触れておけば、学生の「自分が学ぶべき『専門』って何？」という声(「学部の専門って何」という問いとは違うことに注意)への解答として、私は、現状では、「自分で専門を選び取るほかない学部」という乱暴な答え方をしてきた。いずれにしても就職の面接などで、「キャリアデザイン学部って何」と問われるとき、学生がどう答えたらいいかととても難しい学部であることは確かな事実である。

#### (四) 学生の質の変化

先にも触れたように、今日のキャリアデザイン学部の教育の困難は、上に検討した学部理念、あるいは学部の教育研究の構造的問題であると共に、今大学に入ってくる学生の質(の変化)の問題でもあり、その「質」の大きな変化が学部の教育・研究の構造的矛盾をいっそう大きくしているということだろう。

##### (1) 学生の質、その変化について

現象としては多くのことが指摘できるが、整理すると以下のような特徴が把握できる。

第一に、主体的な職業的専門性への目的意識が希薄である。もちろん他の学部でも同様の「変化」は指摘できるが、この学部に来る学生の多くは、どの学部に行くかはっきりしないので、この学部に来て自分のキャリアデザインを立てたい(＝職業選択意識を高め自分の進む専門領域をはっきりさせていきたい)というところで、目的意識

の未確立がそもそもの出発点だという性格が非常に強い。学生の声を見てみよう。しかし②の学生の感想を見ると、この目的意識とは、単に職業的専門性（職業選択の未決定）への意欲というより、人間として生きていく上での社会や現実への関心そのものの弱さ（この学生ではそのような関心の豊かさ）として存在しているようにも思える。

①「私は入学したいまのほうが、キャリアデザイン学部はよい学部だと思っています。まだ何をやりたいかわからなくても、多方面から可能性を探していくことができるからです。しかし選択肢の幅が広い分だけ、個人の責任や判断能力が問われる学部だと思います。私は一般入試でこの学部合格しました。どういう学部なのかということはあらかじめ見てはいましたし、期待も大きかったです。しかし実際入ってみて思ったのは、附属校から何となく上がってきた人が多すぎるということでした。一般入試と推薦では、学習への意欲など差ができてしまうと思います。責任能力を持たない学生の増加はこういうところにもあるような気がします。一人ひとりが当事者意識を持たないと、この学部のメリットや長所は死んでいくだけです。自己責任、判断能力はどこでつけていけばいいのか、どうして持てないのか、疑問に思う毎日です。」（3年）

②「……私は今、この学部に至って良かったと考えているのです。なぜなら今まで受けてきたどの授業よりも自分と密接に関係があり、主体的になれていると感じ、また過去に自分が抱えていた問題をやっと社会の問題として捉えることができたからです。これは私が取りたいと思うような科目しか取らないからかも、これまでの学びに対して嫌悪感を抱きすぎてきたからかもしれません。でも何よりもこの手助けをしてくれたのはこの学部の授業だと思います。社会（教育、学校）での様々な問題を取り上げ、時には教育実践から、時には昔の人々の価値観から、あらゆるアプローチ方法で考える時間があ

りました。今まで受けた内容すべてを覚えているわけではありませんが、忘れられない学びを体験できたと思います。」（2年）

第二に、教育、文化、経営の専門の側からいえば、この学部の基本理念が、自分探しの「キャリアデザイン」を期待してこの学部に来る学生へアピールする形になっているため、この学部の専門としての「キャリア教育」に対応する「専門」が「教育」、「文化」、「経営」という領域を——副次的にはあれ——持っているという意識はどうしても薄くなると思われる。したがって他の学部の教育においては、専門の教員の教育・研究が少なくとも大きなくくりでは自分の選んだ専門領域のバリエーションであるという了解と親近感が成立しているが、キャリアの場合にはその点も希薄である。そういう点で、教員の専門と学生の関心とのミスマッチが他よりは大きいだろう。

①この学部は入学前、まだあまり方向性が決まっていなかった人が学部に入ってから決めていこうと考えるものだと思っていたが、入ってから最初の段階はそれでいいのかも知れないが、自分で方向性を決めて切り開いていくという意味では、他学部以上に自己決定力が問われる学部ではないかと思った。入学前のイメージを引きずったまま、徐々に学年を重ねていくことはとても恐いと感じた。」（3年）

②「私が疑問に思ったのは、CD学部は、CDを中心に教育も経営も文化も授業を進めたいのか[A型]、それともそれぞれの3つの専門性を追求したいのか[B型]ということです。私は今まで前者だと思っていました。でも今日の先生の話では、少し違っていたようです。ですが、2年間通ってみて、後者でもないと思います。なぜならまだ進路が決まっていなかった人が入学しても、例えば経営に特化したような授業もなく、結局教育や文化の授業もとらなければ単位がたりなくなったりするため、専門を追求することはできないと思っているからです。また経

営の授業でも、これを「CD 的に考える……」  
といて、本当に純粋な経営学を学ぶことができません。それはCD 学部に入學したあなたが悪いといわれればそれまでですが、でもパンフレットには3つの専門を学べるとあったし、そもそもその中心のCD というものの定義がわかりません。とりあえず3つの専門の授業はありますが、CD といった専門の授業はないので、核となる部分の意味もわからなくて、周りからアプローチしても意味がないのではと思いました。このままでは、すべてが中途半端になり、CD とは何かという答えが教員によっても異なるのだから、学生が答えられるはずがありません。もっとシラバスや卒業までの必要な単位のあり方から考えるべきではないでしょうか。」(2年)

第三に、大学は確かに資格を得るというような側面はあるが、基本は学問を学ぶということを目的として大学に入るのであり、当然その学問をするという一定のレベルを準備して大学にはいるところであると考えられてきた。もちろん今更この後者を一般的な基準として論じることなどできないということは承知している。しかし、それでも、3年ほど経つと、一部の学生がそういう点でリーダーシップを取り、大学のゼミなどに大学らしい共同学習が点在するようになり、それが同時に多くの学生にとっての大学生モデルとなるような異年齢の接触も生まれてきていた様に思える。ところがこの間の変化は、就活が早期化してきたこともあって、ゼミで四年と三年がじっくり一年間共に学ぶという場がどんどん後退しているように思う。もちろん講義で異学年が共に参加する機会はあるが、そういう講義の場で上級生の学びが下級生を刺激したり議論したりということは極めて少ないのが現実である。そういう点で、学習・研究において学年ごとの分断構造が強くなっている。そのため、学生の中で学びと研究の共同が展開せず、優れた先輩学生のモデルが見えない状況が強まっているのではないかと。

補足すれば、その点にかかわっては、この学部の専門がはっきりしないということが、よりその矛盾を大きくしていると思われる。四年間の分厚い単一の専門を共に学ぶ学生グループと、その内部により希薄な専門の体系を不十分にしか持たない、しかも三領域の異質な専門を学ぶ学生が混在している状況とでは——さらに現実では同一のゼミの中にそういう学生が混在している現実がある——、ある共通の学問領域を基盤とした相互に刺激し合う学習・研究についての協同が成立することの困難さが、より大きいと見る必要があらう。

第四に、学生のコミュニケーションの質的变化である。尾木先生の調査でも指摘されているように、今の学生は孤立しないための「一緒に」動く行動様式、孤立せず自分の居場所を確保するための「同調」のための戦略的コミュニケーションを行っている面が強い。そのため、学生のコミュニケーションは、いくら議論しても、すでに支配的となっている雰囲気や話題や、そのコミュニケーション関係を支配している力関係やを打破して新しいテーマや感覚、関係を創造していく変革と創造の契機を剥奪されており、同化と自閉の空間を生み出してしまふ。それは科学と民主主義の基盤の上に、大学の学習空間を作り出すことを妨げている。こういう空間は、本来、科学と民主主義の場において新しい社会主体を創造する大学の責務＝目的の実現を困難にしているのではないかと。

第五に、学生の中に、メンタルな面で困難を抱えている学生が増加していることである。大学生の中に共感的な関係を創り出していかなければ、多くの学生が大学自体からドロップアウトしていきような状況が広がっているように思える。そういうメンタルな困難は、就職のハードルをさらに高くしているように思われる。

第六に、この間の格差・貧困の拡大、そして就職難が学生に与えている大きな困難と大学教育とは何かというイメージの変化である。就活の肥大化ともいえるべき圧力の結果、学部の3、4年教育が圧迫されてきている状況がある。

## (2) 学習意欲について

しかし学生をどう見るかという点では、以上のような視点だけではなく、学生の学習意欲という点で、深く分析してみる必要がある。一言でいって学生の学習意欲がひどく低下しているのが現実である。しかしこの学習意欲の低下に対して、最近の大学教育戦略の中で、大学の中に競争システムを持ちこむことでこの困難に対処しようという傾向が強く見られることは、はたしてまっとうな対処なのかどうか、慎重に検討してみる必要がある。

現状を学生の声から見てみよう。

①「まずこの学部にはいるときに、良くわからないままに入学して、良くわからないままに勉強が始まるから、目的意識を持つことができず、授業の内容に知的好奇心を満たすものも見えない。そして毎日が意味のない日々へと変化していく。大学に入学してから様々なことを学んでどこかに興味を持って、その分野を研究していくことができるというのは、他のどこにもないキャリアデザイン学部の魅力だと思う。でもそのせいで、結局最後まで自分がしたいことが見つからなかったり、まったく興味の起きない分野の勉強も含まれるために、授業中話していたり、寝ている学生の増加が起こるのだと考える。」(2年)

②「社会人にとっては多様な学問を学べることは意義深く、この学部に入學できて本当によかったと感じている。ただキャリアデザイン学自体が歴史の浅い学問であり、時代に応じて柔軟に対応する必要があるため、時事問題への興味、関心のほうが高いのではないかな。……先生方は、「君たちの学部は就職に有利だ」、「キャリアを学んできたのだから……」などとおっしゃるが、入門しか学んでいないとなると、まさに「就職予備校」となってしまう。……先生がおっしゃるように、大学の専門は、自分で創るしかないが、「キャリア」と強引に結びつけ

ている授業や、まったく「教育」とは思えないキャリア教育の授業もあった。現役学生の興味が、「単位の取りやすい先生」ばかりに傾き、まったく先生の声が聞こえない……お菓子を食べている、爪を切っている、大騒ぎしてゲームをしている授業もある。学部の質、価値や品性は、一人ひとりの行いによっても決まると思うが、それを許す側にも問題を感じている。3年から卒論の準備を始め、自らは専門性を高めていきたいと考える。」(2年)

③「なぜ学生が友だちと同じ授業やゼミを取るのか、それは彼らが自分の興味や意志に気がついていない、または持っていないからだろう。そのような生徒に対して、軸を作る手伝いは、きっかけを出して、彼らが自分で考え、自分で気づいて、はじめて考えや行動力をつけられるように(することだが、そういう方法で)先生方は教えられていない。……みんな軸ができておらず、ただ漠然とした不安や焦りに駆られているからこそ、クラス単位など、安心できる場を求めている。これではCD学部の価値が生かされていない。私はCD学部で、CD学を学んでいると思っている。そこから日本人的教育などの問題が見えて来ている。軸さえあれば専門性はついてくる。しかし軸がない人に専門性をつけさせても、すぐに“くずれて”しまう。問題点を考えるとき、一番最初に解決すべきことは軸を持つこと。軸を持てるよう、きっかけを与えてあげることが大切ではないだろうか。軸を持ち、自分が求めるもの、興味が見えれば、人は自分で進んでいけるのではないだろうか。」(3年)

学生の学力についての問題性を二つに区分してその質をとらえる必要がある。第一が、学習意欲の喪失であり、第二は、いわゆる学力の低下である。しかし意外にこの二つが区分されないまま、中心問題は学力低下にあるかのように捉えられて、入学者への〔補習〕と大学内部への競争システムの導入(例えばGPAの導入)で対処がなさ

れようとしている。

より本質的に考えるならば、今日の学生の学習意欲の喪失は、大学受験までの「競争の意欲」の獲得に根源がある。競争の意欲が励まされる学習空間では、文化・科学の価値は、高い評価を獲得するという目的の側から照らし出される。豊かな文化や価値に接しているにもかかわらず彼らはその価値に触れることなく、逆に学習すべき文化・科学は、苦役の負荷となる。学習が意欲されているにもかかわらず、その深部においては学習意欲の空白が浸透する。ここに学習にかかわる新たな人格構造が出現する。学習の意欲は、競争が組織されるその場に人格が位置づけられるときのみ、呼び出されるという人格構造である。それは、自らの主体的な目的と結合された学習意欲の喪失を意味する。それは、長期にわたる受験競争から解除された大学生が、受験勉強から「解放」されたときに実感する学習への目的や意欲の空白感として実感するものである。しかしそれに止まらず、人生のより早い段階から、競争への参加を強要されて、未だ強固な目的の形成が困難な発達段階から、競争以外の目的を持たない学習を強要され続けることによって、より深刻なものとなる。幼い頃からそういう目的の系の発達を抑止されて競争の意欲を肥大化させられると、評価から自立できない、評価のないところでは目的が見いだせない受動的な人格構造が形成される。そして目的を喪失した学習は、学習それ自体の内発性や創造性を剥奪されて委縮し、主体性を喪失する。これが日本の大学受験システムが増幅している日本の学生の人格構造である。そして、この事態は、今日の支配的な現実であると見るべきだろう。

このような事態に対して、就職へ向けた意識化としてのキャリア教育（教養としてのキャリア教育の矮小化されたもの）なるものが有効であると楽観することはできない。職業が決まっていないから目的意識がないのだとして、職業選択意識の獲得をせかせることによって、この人格構造を変えることは出来ない。この困難の回復のためには、一つには、科学や文化の価値との本格的な出

会いを回復すること、もう一つには本格的な青年期を回復することが不可欠であろう。生きる意味、世界の意味、歴史における自己の位置、要するに青年期に相応しい自己形成、社会との青年期的な再統合、思想形成のプロセスをたどるという「豊かな」成長の過程を回復しなければならないのではないか。そのことを抜きにして、就職難という競争の論理（社会の論理）を、GPAで大学の成績競争へとドッキングしてみても、学生の本質的な学習意欲の喚起には結びつかないのではないか。あえていえば、私は、そういう学生の学習意欲の立て直しが進行すれば、学力低下という現象は、学生自身が自ら意欲的に克服していくのではないかと考えるのである。

### (3) 学生に対する教養教育の核心とは何か

以上のような検討を踏まえて、最後に、学生に対する教養教育の核心とは何かについて、いくつかの視点を提示しておこう。それは私の頭の中では、むしろ「教養としてのキャリアデザイン教育」に近いものとしてある。これらについては別の機会に本格的に検討をしてみたい。

第一に、大学における学問研究とは何かについて、その本質理解に向けた学習体験を創り出すこと。文献を読んで思考する基礎訓練を行うこと。その際に学生の思い（生活の中の想い、矛盾、課題、等々）と学問とを結びつけて科学に目覚めるような方法を重視すること。

第二に、討論ということを紹介した学生の積極的なコミュニケーション関係を創出すること。それは、同化と自閉の戦略的コミュニケーションに明確に対抗する質を持つコミュニケーションとして創出されなければならないだろう。大学の中に本格的な討論、議論、論争空間——それを介してこそ公共的な学びの空間を大学の中に作り出せる——を創り出すこと。

第三に、競争世界としての社会モデルを打ち破って、日本の現実と出会うこと。学生を社会と世界へ誘い出すこと。学生の青年期を引き出し燃

焼させること。そういう課題に応える教養としての学問の形成もまた課題になる。そういう社会との出会いの方法でもあるような教養学、講義の創出。

第四に、大学入学と同時に、大学生としての生き方と学習・研究に取り組む学生モデルとの出会いを組織すること。多様な学生のつながりと交わり、学びや活動のネットワークの形成。

## おわりに

以上のようなことを考えてみた。キャリアデザイン学部直面する困難についての私なりの考え方である。率直な意見交換の一つの契機になれば幸いである。(2009-12-30)